

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料

第146号

毎月発行

発行 2024年(令和6年)7月16日 火曜日

2024年(令和6年)7月16日 火曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、70歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。新型コロナ禍を乗り越えて4作目制作に趣向を凝らすことと東北文化研究を標榜。



【新シリーズ③】『東北って何だろう?』 「東北の位置づけ」を明確にするには何よりも 東京との関係を明らかにすればよい…そこで両 者の関係についてもっと深掘りしてみよう!

まず、『東北って何だろう?』シリーズへの第三回目のアプローチを「東北と東京」という観点のみに絞って、さらに掘り下げてみたいと思う。

このアプローチは、このシリーズの第一回目でも少し触れたが、この関係をもっと深く掘り下げ、あるいは、もっと時代を遡って考えてみたいと思う。

また、この試みは一回で終わらないかもしれないことをまもなくして予告しておく。



地図で「東北」と「東京もしくは関東圏」を見比べて欲しい!

「東北なるもの」をより際立たせ、輪郭をはっきりさせるために最も有効な方法のひとつと思われるのが、「東北」と「他の地方」との関係をはっきりさせることだ。

「東北」と「東京」との関係に正面から切り込むのがむずかしい理由

とはいえ、「東北」と「東京」との関係は正面切った取り上げるには、さまざまな「障害」があるのも確かである。

その「障害」を避けていては、いつまでも「東北なるもの」にはたどり着けないと考える。

最初に挙げるべき「障害」とは、「東北人」にとつての最初の「東京体験での衝撃」

東京都人口 14,170,275人
(2024年5月29日東京都発表)
東北全体の人口 842万6000人
(総務省発表2022年の人口推計)
2020年国勢調査によると、日本の人口割合の11.1%、なんと日本人の約10人に1人が東京に住んでいる計算になる

『東京へ来る地方出身者の方は東北の方が多と言われてはいますが、実際は近郊の神奈川、千葉、埼玉の首都圏を除くと、北海道、大阪の順となっており、東北は他県の方とさほど差がありません。』
東京の地方出身者の割合はどのくらい? | TMSイベントポータル (exeo-japan.co.jp)より

国立社会保障・人口問題研究所の「2016年社会保障・人口問題基本調査—第8回人口移動調査」によると、**東京生まれ東京育ちは、東京の人口の55%となっており、45%の方は地方出身者**となっている
上京の理由としては
①進学・就職
②結婚・婚活
③夢・憧れ
④環境を変えたい
「第8回人口移動調査」およびESCAPE TOKYOより拝借。

【3代続けば、江戸っ子】

「江戸っ子」という言葉の初出は18世紀後半、いわゆる田沼時代です。よく「3代続けば江戸っ子」と言われていますが、こんな言葉があること自体が、当時、江戸に生まれ育った者が少なかった何よりの証拠といえるかもしれません。ちなみに、江戸後期の戯作者、西沢一鳳は、「両親ともに江戸生まれの“真の江戸っ子”は1割しかいない。片親が田舎生まれの“斑(まだら)”が3割、両親ともに田舎出の“田舎っ子”が6割もいて、その連中が、おらぁ江戸っ子だと騒いでいる」と書いています。江戸は、人々が流入・流動する町。つまり、先住者と新参者がせめぎ合う町でした。仕事を取り合う状況のもとで、以前から江戸に住んでいる者は「3代続いた江戸っ子」という言葉を、優先順位を主張する呪文として使い、情けない思いをした時のツッパリにもしたことでしょう。また、田沼時代は、江戸商人が大きく成長していった時代でもありました。それまで上方の商人たちに押しまわられていた江戸商人のなかから、江戸生まれ・江戸育ちの豪商が出て、町人文化を育てるだけの財力を持つようになってきたのです。そのことで、「江戸っ子」という言葉には、ブランドパワーも生まれました。しかし、3代続いていようが、財力があろうが、“いき”で“いなせ”でなければ「江戸っ子」とは言えない……。このあたりに、「江戸っ子」という言葉の真髓があるのです。

『東都のれん会』より拝借

たり、馬鹿にされる痛い体験である。とても大阪人のように大阪弁丸出しで押し通すことはできないし、大阪出身を隠さず堂々としていることもむずかしい。

まず、こうした「東京への劣等感・東京の圧倒感」を一旦、棚上げして検討を進めなければならぬ。

「大阪人」は堂々としているし、その裏には、東京は少し前までは、ただの田舎であり、沼地の広がった辺鄙なところであり、その点で、大阪や京都の方がずっと昔から都会だし、明治になって首都の座は明け渡したが、いまも負けないという「氣迫」が伝わってくるのだから、それで馬鹿にすることが出来ないのだろう。

「東京人」は「大阪人」を馬鹿にするのには、裏返して言えば、「東北を、近しい」と思っているからかもしれない。

「大阪人」が「東北人」の「東北なまり」を馬鹿にするのは、裏返して言えば、「東北を、近しい」と思っているからかもしれない。

「少ない東京生まれ東京育ちの「生粋の東京人」

また、「東北出身」を馬鹿にする「東京人」というようにひとまとめにするが、実際問題として、東京在住者のうち、ずっと東京に住み続けている人間はどれくらいいるだろうか？

国立社会保障・人口問題研究所の「2016年社会保障・人口問題基本調査」第8回人口移動調査によると、東京生まれ東京育ちでは、東京の人口の五十五%

となっており、四十五%は地方出身者となっている。現時点での割合なので、ちよつとびっくりする数値である。

「なあんだ、東京人といつても半分近くはイナカモンではないか！」という声が聞こえてきそうである。

それなのに、「東北人」を馬鹿にするなんて、おかしいと憤るかもしれない。

しかし、東北からの流入はそれほど多くない

では、東京の四十五%の地方出身者のうち、東北出身者の割合は圧倒的なのだろうか？

一般的には、高度成長期の「集団就職」で、東北出身者が大量に東京に流れ込んできたイメージがあるが、実態はどうなんだろうか？

そこでは意外な結果が待ち受けていた。

『東京へ来る地方出身者の方は東北の方が多いと言われていますが、実際は近郊の神奈川、千葉、埼玉の首都圏を除くと、北海道、大阪の順となっております。東北は他県の方とさほど差がありません。』(TMSイベ

ントポータル)

ほんとは意外な結果であった。

東北からすると、東北を出た人々はみな東京に出て行って、東京は東北出身者であふれているのだからと思ひ込んでいたが、実態はそうではなかったのだ。

そうすると、何やら、東北の東京に対する思い入れが強すぎるのではないか、東北の東京への「片思い」ともいえる状況ではないか？

たしかに、東北の総人口という観点からすると、東北から東京への移動者割合は高いかもしれないが、東京にしてみれば、全体に占める割合は大した数字ではないということになるのだろうか？

東京が急激に巨大になりすぎたための「東北の片思い状態」と言えるかもしれない。

江戸後期の戯作者、西沢一鳳という人が、次のように書いているのを発見した。「両親ともに江戸生まれの“真の江戸っ子”は1割しかいない。片親が田舎生まれの“斑(まだら)”が3割、両親ともに田舎出の“田舎っ子”が6割もいて、その連中が、おらぁ江戸っ子だと騒いでいる」

江戸後期のこうした状況は、いまも続いているのではないかと推測できる。

筆者も、両親ともに田舎出の「田舎っ子」に、自分は「江戸っ子」だと言われた経験があるの、「田舎っ子」ほど、「江戸っ子」を振りかざして、「東北人」を「馬鹿にするケースが多発するのであるか？」

それに反して「東京人」は、にぎやかに大阪弁をしやべり、うるさい「大阪人」には卑屈になるのだろうか？

「江戸っ子」というワードは仕事を優先しても「江のっ子」の切り札？

現時点での「東京人」の構成は判明したが、過去はどうだったのだろうか？ その前に、東京に三代以上続けて住んでいる生粋の「東京人」などだけいるのか知りたいという調査だが、適切なデータがないことが分かった。

では、こうした「東京人」の過去について、もっと時代を遡らうかと思ひ直し、調べてみると、該当する状況があった。

江戸後期の戯作者、西沢一鳳という人が、次のように書いているのを発見した。「両親ともに江戸生まれの“真の江戸っ子”は1割しかいない。片親が田舎生まれの“斑(まだら)”が3割、両親ともに田舎出の“田舎っ子”が6割もいて、その連中が、おらぁ江戸っ子だと騒いでいる」

江戸後期のこうした状況は、いまも続いているのではないかと推測できる。

筆者も、両親ともに田舎出の「田舎っ子」に、自分は「江戸っ子」だと言われた経験があるの、「田舎っ子」ほど、「江戸っ子」を振りかざして、「東北人」を「馬鹿にするケースが多発するのであるか？」

それに反して「東京人」は、にぎやかに大阪弁をしやべり、うるさい「大阪人」には卑屈になるのだろうか？

い、仕事をより多く獲得していたのかもしれない。「江戸っ子」に託す思いは今と大して変わらない状況がすでにあったのだ。

「東京への劣等感・東京の圧倒感」を取り除いて新たな関係へ！

前々号では、『東日本を「東もん」とひとくくりにされたことで、奇妙なことに、東北出身の筆者は東京圏を非常に身近に感じた。いや、ほとんど身内に近い感覚が生まれた。』と書いた。その気持ちには変わりないが、とにかく東京は短期間で急激に巨大化し過ぎた。いずれ、地方分権が進めば、東京の人口は思いがけない方法で減少するかもしれない。

それに対し東北の人口はこれ以上減少することはないと思うし、むしろ新たな産業地域として見直されて、人口が増えるかもしれない。そうなるなら、現在の「ちびっ子対巨人」の関係は若干修正されていくだろう。そうなった時には、「東モン同士仲良くやろう」と言い合いたいものだ。

次回以降も深掘り継続

「東北と東京」という観点のみに絞って、さらに掘り下げてみたら、言いたいことの半分にもならなかった。

積み残しは次回以降に持ち越そうと思う。

次回以降は、歴史的にみての「東北と東京の親戚関係」を深掘りしようと思う。

今後の東北再興に向けての「東京」との関わり方の指針案

- ① 「東京への劣等感・東京の圧倒感」のひとつひとつを取り除く！
- ② 「江戸っ子風」には大した意味はないと考える
- ③ 東京がずばぬけて大きく成長したが、「東モン」同士で、連携を模索していく！
- ④ 「東北」と「東京」の新たな関係を構築する！

金色堂建立九〇〇年 に寄せて

世界遺産登録から一三年

六月二十九日は岩手県の条例で定められた「平泉世界遺産の日」である。一三年前の二〇二一年のこの日、平泉の文化遺産が晴れて世界遺産に登録されたことを記念して定められたのである。

東日本大震災の発災から三ヶ月というタイミングでそのニュースは、東北にとつて明るい話題となった。それまで、東北には世界遺産のうち自然遺産としては白神山地があったが、文化遺産はなかった。その初の文化遺産の登録となったこと、特に、平泉は二〇〇八年に一度「登録延期」となっていて、そこから再チャレンジでの登録だったこともあった。このことは、震災から立ち上がるうとしていた皆さんの人を勇気づけたのではないかと思われる。

建立九〇〇年のイベント

そのようなわけで、毎年六月二十九日の前後には、岩

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmas/



Facebook
https://www.facebook.com/kouchi.ootomo

手県内、とりわけ平泉周辺では、世界遺産関連のイベントがいろいろ開催されているが、特に今年は、世界遺産に登録された平泉の文化遺産の中の中尊寺金色堂の建立九〇〇年という節目の年であることもあって、世界遺産の日に限らず、関連する企画が目白押しである。

今年一月から四月まで東京の国立博物館で開催された「特別展中尊寺金色堂」は、期間中二五万人超の来場があったそうである。これは特別展としては過去最多であったとのことである。中尊寺では、讃衡蔵での企画展や記念御朱印の頒布などがあり、県立の平泉世界遺産ガイダンスセンターや町立の平泉文化遺産センターでも金色堂に関する企画展が開催されている。

清衡の「供養願文」
その中で「世界遺産の日」の特別講演会のテーマが「清衡・供養願文そして顕家」とのこと、私として大

いに関心のある内容であったので足を運んだ。東北大学大学院の柳原敏昭教授の講演であった。

奥州藤原氏初代の藤原清衡の中尊寺建立についての思いが詰まった「供養願文」特にこの中の二階鐘楼について書かれた部分を読むと、そのあまりに高邁な思いに私などつい泣きそうになる。曰く、東北では昔から官軍と蝦夷がたたくさん亡くなつた。人以外の生き物も数限りなく殺された。この鐘楼の鐘の音が響くところ、苦を抜き榮を与え、罪なくして命を落とした全ての魂を極楽浄土に導くのである。敵味方を問わない、何なら人間であるかどうかも問わない、とにかく心ならずも生を閉じざるを得なかった魂を等しく浄土に導きたい、そのために中尊寺を建立したというのである。

世界遺産登録に当たっては清衡のこの「供養願文」の趣旨も大いに考慮されたそうだが、清衡のこの思い、震災で心ならずも命を落とされた皆さんの人にも向けられているように、当時の私は思ったものである。

北畠顕家の生涯

建武新政期に東北を統治したのが陸奥国府の鎮守大将軍北畠顕家だが、柳原教授によれば、建武の新政は失敗ばかりだったものの、この陸奥国府については数少ない成功例と言える、とのことであった。
確かに、北畠顕家の下、が

つちり組織化されたこの陸奥国府は、「奥州小幕府」との名称もあるくらいで、奥州のみならず出羽も含めた東北全域を掌握していた。足利尊氏が反旗を翻した際には、後醍醐天皇の求めに応じて北畠顕家は奥羽の大軍を率い、後の豊臣秀吉の「中国大返し」の進軍速度を上回る速さで上京、足利尊氏の軍勢を打ち破つて尊氏を九州に追い落とした。

しかし、足利尊氏を駆逐した顕家が奥州に戻つてみると、顕家がなくなつていた奥州では足利方の勢力が力を増しており、顕家はその対応に追われることになる。実は清衡の「供養願文」、原本は失われていて、現存するのは書写されたもの二種である。そのうちの二つが、この顕家の書写したものである。顕家が「供養願文」を書写したのは、この一度目の上京から奥州に戻つた時期と推測されることである。

顕家は、日増しに強まる奥州の足利方との合戦に明け暮れ、陸奥国府を守るのに困難な平地の多賀城から難攻不落の霊山に移すなどしている。そのような中またしても後醍醐天皇から軍勢を率いて上京せよとの命が下り、一度は断つたものの再三の要請に断り切れず再び奥州を出立、行く手を阻む足利勢を撃破しながら上京するが、連戦に次ぐ連戦で疲弊し、ついに石津の戦いで顕家は戦死した。享年二一歳だったという。亡くなる七日前に、後醍醐天皇を諷める有名な「北畠顕家上奏文」を著している。

陸奥国府に着任したのが一六歳の時で、その歳で奥州を軍事面、行政面で完璧に掌握、統治していることから、文武両道に秀でた傑出した人物だったことが窺える。そこから最期まで僅か五年だったが、東北の歴史に鮮烈な印象を残した。

なぜ顕家は書写したのか

どのような経緯で顕家は「供養願文」を書写したのか先にも述べたように、この当時、「供養願文」の原本は失われていた。現在残されている二つの書写本は、それぞれ「輔方(すけかた)本」と「顕家本」と呼ばれており、「輔方本」が先にあって、「顕家本」はそれを書写したものとされる。

まず、「輔方本」には藤原輔方がこう書いている。嘉暦四年(一二三九年)に中尊寺の阿闍梨が私のところに持ってきて奥書と端書を記してほしいとのことだったので筆を執つた、持ってきたものは正本を書写したものだ、という。つまり「輔方本」は藤原輔方が書写したものでなく、元々中尊寺にあった「供養願文」を輔方が鑑定して、これは元のものを書写したものであると認定したものだと言える。

どうしてそのようなことが必要になったかについては、「顕家本」に記載されている。顕家はこう書いている。供養願文が不慮のことで紛失してしまったので、正本に見立てるために急ぎ書写した。と。顕家はその際、先にあつた輔方本を書写したのではないかと考えられているのである。

奥州において足利方との鏢迫り合いをしながら、奥州各地の様々な案件について指示を出した文書が残っているように、この時期の顕家は極めて多忙だった。その顕家が、恐らくは中尊寺側の求めに応じて「供養願文」を書写したのは、奥州の中に占める中尊寺の存在が、建武新政期にあつても大きかつたゆえではないかと柳原氏は指摘していた。

それで、先に藤原輔方が正本を書写したものと認定した書写本を、鎮守大将軍の名でさらに書写したのではないかと推測している。中尊寺の存在が大きかつたことは、この後の推移からも窺える。顕家の死後、奥州では足利方の勢力が強まり、結局奥州は足利方が置いた奥州総大将の石塔義房の指揮下に入るようになる。中尊寺も足利方の管轄下に入るが、中尊寺には石塔義房が奉納した梵鐘が今も残っている。足利方もやはり中尊寺の存在は無視できなかったようである。

「東北は日本の半分」

加えて、個人的には、北畠顕家が「供養願文」を書写した理由として、顕家が奥州を治した先例として敬意を払っていたのではないかと推測している。

養願文」にある趣旨を鎮守大将軍として受け継ごうという意思もあつたのではないかと考えている。時代がさらに下ると、奥州全域の支配を目指した伊達政宗も平泉を見て回り、中尊寺に客殿を建立し、金色堂を修復しているが、それにも同様の思いがあつたのではないかと思うのである。

ところで、保元の乱(一一五六年)から暦応二年(一二三九年)の後醍醐天皇崩御までを記述した歴史書「保暦間記」には、建武新政府が陸奥国府を設置し、北畠顕家を遣わした理由として、「奥羽両国は日本半国など申す国であるから」と記している。建武の新政前後の約五〇年の歴史を記した軍記物語「太平記」にも、同様の表現が出てくる。「奥州五十四郡あたかも日本半国に及びべし。奥羽両国、あるいは奥州の五十四郡は日本半分の及ぶような国だ」というこの表現、当時の日本における東北の存在感の大きさを窺わせる。

ちなみにこの時代、北海道はまだ中央の支配が及んでいないが、北海道を除いても、面積で言えば、東北だけでは日本の半分にはならない。しかし、実際の面積がどうこうということよりも、その時代に日本の半分は東北だと認識されていたことを示すこの表現は注目してはならないか、「供養願文」がこう書いている。

「東北は日本の半分」
この企画展の目玉は、なぜか静岡の伊豆山神社に保存されていた清衡の大事業である「紺紙金銀字交書一切経」のうちの二巻の実物が公開されることである。これは仏教の全てのお経を紺色の紙に一行毎に金色の字と銀色の字で書き分けたという手の込んだもので、本来五四〇〇巻近くあつたとされるが、後の豊臣秀吉が中尊寺から持ち出させたため、現在中尊寺には二〇〇巻ほどしか残っていない。持ち出されたほとんどは高野山に保管されていて、なぜそのうちの二巻が伊豆山神社に保管されていたのかは不明な点も多いが、ともあれほぼ四〇〇年ぶりに里帰りしたことになる。

清衡に関する伝説のある山

さらにその後は、一関郊外の自鏡山(じきょうざん)へ行つてみた。清衡がこの山の山麓の東西南北に四つ

の寺院を建立したという言い伝えの残る山で、一関から栗駒山に行く途中にある、整つた三角錐の形をした山である。通り掛つたことはあるものの、登るのは初めてであった。山域に入つてすぐ感じたのは、標高三一四メートルの里山であるにも関わらず、大きな木が多いということである。スギとブナが混在しているが、どちらも立派な木がそこかしこにあつた。この自鏡山かつて修験道の聖地だったそう、それで木も伐採されずに残つたのである。

現在、山の中腹に吾勝(あかつ)神社があり、さらに登ると山頂にその奥の宮があつた。山頂でも三六〇度パノラマというわけではないが、木々の合い間から栗駒山が見えた。

平泉を考えるきつかけに
平泉は今後節目の年が続く。今年には平泉の在りし日を今に伝える金色堂の建立九〇〇年だが、再来年の二〇二六年は「供養願文」に記されている「鎮護国家大伽藍一区」が落慶して九〇〇年、その二年後の二〇二八年は清衡が亡くなつて九〇〇年である。それぞれの年にまた、興味深い企画があるに違いない。平泉が東北にとって何だったのか、平泉が輝き放つた一世紀は今の東北にとってどのような意味があるのか、じっくり考えるきっかけにしたい。

東北発「食の錬金術」と縄文から未来へ渡す山の火の事

いい齢をして長年独り暮らしのままの私は郷里の姉によく心配されるけれども特に毎日の食事に関しては結構うるさく言われるものである。例えば、「漬物は野菜ではない。野菜代わりに食べるな!」という小言は定番だ。

実のところ、独り暮らしを始めた二十代から三十代にかけての頃はそれ程食へていなかった漬物を、四十代になると食卓の重鎮に置くまでになっていた。その理由は、まず単純に、齢を経て漬物の美味さに気づいたからに外ならないだろうが、それと併行し私が東京から東北に「回帰する」という名目で「仙台に」転居してきたという側面も大きい。



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始めると東北好きである。

大陸から伝来した中国野菜という事で、漬物も油で炒めるという中国的発想のご飯とともにたらく戴く阿蘇名物へと発展したものであろうか。近年、若者世代で「キムチ離れ」が進むという韓国でもかつて「キムチがあれば他に何もいらない」という、その家の奥さんへの称賛を意味する常套句があったように漬物が穀物とともに食卓の主役である風景は確かに存在したのだ。と回想するのである。

漬物は寒冷地の保存食として発達したものである。当然東日本以北に文化が濃厚であろうと思っていたが、基本的には正しいながら全国的にダントツなのは京漬物で知られる京都であり、奈良・滋賀がこれに続くようだ。高菜漬けや沢庵、つぼ漬けが有名な九州始め西日本での消費量は総じて低く、東海・北陸から北関東にかけて徐々に増加し、東北では山形・宮城が最も多くなつて、秋田・青森ではやや少なくなる(総務省・二〇一七年度都道府県別漬物消費量より)。

以前、納豆に関する拙稿にて言及した、海外の強烈な発酵食シユールストレミングやキビヤックなどと同様、日本でも塩辛、新巻鮭、鮎寿司など動物性の漬物は少なからず愛好され、また浅漬け、松前漬けなど発酵を経ない漬物も数多い。さて、私と言えば日頃

ほとんどの産物が、東北のものが一番であると偏愛気味なところがある事は今更書くまでもない気がするが元来郷土庄内の気質・風土を嫌って東京へ出て行ったような人間であるから今も当地には愛憎半ばする面強く、だからという訳ではないがラーメンは福島県が最高だとかコメは秋田・岩手・宮城・それに新潟も甲乙つけ難いとか、必ずしも庄内のもので一番ではない主義なのである。これが日本酒や言わずと知れた「だだちゃ豆」そして漬物となつてくると話が違ってくる。枝豆に関しては無論の事、酒選びでハズレのない事では東北他県・同山形県の内陸部ともに比べ物にならず、漬物に至っては「美味い漬物は東北に数あれど、野菜として、時に主菜として常食できるのは唯一、山形(特に庄内)産の胸を張ってしまうのである。勿論他県にも多様な漬物はあるのだが、青森県では『ねぶた漬け』(松前漬けに山の恵みを加えた形のもの)、秋田ならば『泣く子も黙る?』『いぶりがっこ』が突出し過ぎる感あり、一方岩手県の場合は有名な『金婚漬』も『ほろほろ漬』もかなり昔気質風でしょっぱ過ぎ(近年のヒット作『味噌っこ胡瓜』は絶品)主菜の野菜とするには味も特殊性も強い気がする。宮城県にも様々な漬物が

あるが、代表的なものは『長なす漬け』で地味といえば地味である(近年一旦衰退した「仙台白菜漬け」が復興、注目されている様子)。逆に福島県の場合は代表的漬物が『いか人参』でこれも少々特殊過ぎる印象(私個人は野菜としてモリモリ戴いているが笑)。さて、山形県の内陸と言えは仙台でも高い知名度を誇る『だし』(胡瓜・茄子・茗荷等を細かく刻み、オクラやめかぶで粘りをつけしたもの)や、菊の花びらに十種もの山菜・野菜を加え長期熟成させた『晩菊』。そして実は九州の高菜の仲間である「山形青菜」を用いた『青菜漬け』(主に茎を使用)に『おみ漬け』(主に葉と多様な野菜を刻んで使用)など、食卓の脇役というよりは納豆とともににご飯にかければ完璧な食事となるようなまさに主菜といった貫禄を持つものが多い。一方、庄内の方では仙台でも多く出回る『ぜんご漬け』(胡瓜・菊・茗荷等七種を刻んだ無着色の福神風)や秘伝の醤油だれが絶品の『しなべきゅうり』酒粕漬けやからし漬けなどで知られる地元ブランド『本長』の漬物など、一見どれも地味ながら極めてレベルの高い逸品揃い。特に日常的に多く食せるよう『ぜんご漬け』や『おみ漬け』は野菜の種類が豊かな上に塩分が抑えてあり、多分に手前味噌ではあるがや

はり山形県の漬物は野菜摂取の形として現代的な理想に迫るものという気がするのだ。更に一つ、庄内の名産として忘れてはならない漬物がある。実は、それこそが私が漬物に興味を持った最初のきっかけだった。『赤かぶ漬け』がそれである。そのきっかけとは、民俗学者・赤坂憲雄による「東北学」運動の序章『東北学へ』(一九九六年作品社)である。氏の東北学関連の著作には必ずといって良い程に登場する穀物「ヒエ」とともに東北の食及び農法の原点として、縄文時代から続くという「焼畑」農法によつて栽培される赤かぶ(温海かぶ)が取り上げられ強い印象を残していた。焼畑は国内では主に山間部で行われてきた農耕形式で、森林や原野を伐採した上で火を入れて一帯を焼きその灰を肥料として作物を栽培するものである。南米やアフリカなどの熱帯では現在も大規模に行われ、森林火災・環境破壊に繋がるとして発展途上ので粗放な農法と批判されてきたが、本来は「土地の持つ回復力を利用する」即ち一度使用した土地を別の土地に移つた間に森林として再生させる事で永久的に循環・持続が可能であり、湿潤環境に適応し少ない労力・資本投下で効率的に食糧生産ができる優れた農法なのだ、と大阪大学の佐藤康也教授は

言う。日本では古くからヒエ・アワ・ソバや豆類が栽培されてきたが、中でも焼畑に適した作物として現在ではほぼ赤かぶに特化した農法となつているようだ。赤かぶ漬け自体は全国各地にあるものであるが、現在焼畑農法で赤かぶ栽培が行われているのは山形県温海地方と隣接する新潟県山北地方、福井県の味見河内地域、そして宮城県椎葉村の四ヶ所のみ。温海地域の火山灰性の土壌は焼畑により土のミネラル分の増加に作用、更に杉林の腐葉土が天然の肥料となつて色つやが良く美味な赤かぶを育てるのだという。危険な面を持つ重労働の上、人手不足・高齢化の課題にも晒されているが、近年鶴岡市も含め各地で「焼畑サミット」が行われるなど焼畑文化の見直しが図られつつある。

ところで赤かぶも含めナスやキュウリなどは「栄養がない」野菜の代表のように言われてきたが、近年それは間違っている事が知られてきている。過去ギネスブックに「カロリーがない野菜」として載った事からくる誤解もあり、確かに糖・脂肪などのエネルギー要素は少ないながら、赤かぶにはアントシアニン(老化防止等)、ナスにはナスニン(抗酸化)や食物繊維、そしてキュウリにはビタミンK(カルシウム吸収補強)として全てに共通してカリウム(血圧調整)が含まれるのだ。加熱に弱いとされるカリウム等は漬物にする事で効能が保たれる他浅漬けは生野菜より多くの食物繊維が取れるし、糠漬けや柴漬けにし発酵を加える事で腸内環境を整える乳酸菌や多様なビタミン群を蓄える事ができる等、日々の食卓の主役たる野菜として優れた要素に満ちている事は間違いなく思われる。

しかしここで過去印象的だったある著作の一文を私は思い出すのである。「栄養素なんて忘れなさい」それは幕内秀夫による『粗食のすすめ』(二〇〇三年新潮文庫)にある。戦後の栄養学に疑問を呈し、「二十品目も食べている民族などいない」として牛乳始め西洋から導入した食習慣を否定、コメ・味噌汁そして漬物を基本とした質素な和食に回帰する事が日本人の真の健康と長寿に繋がると説いたのである。極端さや間違つた記述で批判も多い著者だが、時代によつて主張を変える栄養学などよりも土地の人々を長い年月育ててきた食文化が重要とするその基本理念には唸らされ



宮城県内で交配した新品種小松菜『河北菜』の浅漬け



しし踊り



ヤマザクラの実



夕焼けにラドン



ナツツバキ



巣から落ちたシジュウカラ

シリーズ 遠野の自然

「遠野の小暑」

遠野 1000 景より

いつの間にか、今年もすでに半年を過ぎていたことをすっかり忘れていた。ここまでに、いろいろなことがめまぐるしく、入れ代わり立ち代わり起きたせいである。

正月早々には、能登で大地震があつて、いまだにインフラ等が復旧していない場所もあるようだ。

東北の経験があまり活かされていけないことが残念でならない。

それ以外にも、国内でも、世界でも、さまざまな事件が次々に起きて、とても落ち着かない。

いつもの感想になつてしまふが、遠野の風景を見ているとほっとする。地に足がつく感じがするのだ。



ノイチゴ



ハタザオキキョウ



オニノヤガラ

新シリーズ【東北を再発見する旅】…⑩ 岩手の巨石をめぐる旅 岩手に残る巨石文化…「アラハバキ信仰」に関連があるらしい



岩手・立石神社の巨石

岩手県の「巨石信仰」に興味を抱いた「きつかけ」は、古代東北の倭国長（ふしゅうちょう）であった「安倍一族」の「巨石信仰」である。その「安倍一族」の信仰は「アラハバキ信仰」であったこと、そして「アラハバキ信仰」のご神体としての「巨石神社」を信仰しているという関係にとっても興味を持ったからである。

まさか、安倍一族が、筆者が前から興味を持っていた「アラハバキ神」を信仰し、さらには、これも筆者が興味を抱いてきた「巨石信仰」にも関係すると知って非常に驚き、また奇妙なことに非常にうれしかった。こうして、安倍一族のおかげで、それまでバラバラ

に興味の対象だった「アラハバキ神」と「巨石信仰」が直結することになった。そんなことで、早速、岩手にある「アラハバキ神」に関連のある「巨石神社」を調べて、すぐに出かけた。いまだから四年半前のことだった。選んだのは、一関市にある「立石神社」と、奥州市にある「磐神社（いわじんじや）」、それに東和町にある「丹内山神社」である。

東京から一ノ関まで新幹線で行き、そこでレンタカーを借りて目的地をめぐるといういつもの旅だった。しかし、最初の訪問予定の「立石神社」になかなか到着せずほんとうに往生した。もちろん初めて行く場所であるので、慎重に、カーナビもフル活用して出かけたはずだったが、思惑は完全に外れた。

大きな道路からの案内看板はすぐ見つかり、そこから山道に入ったが、前日に降った雪のせいか、神社への入り口がなかなか見つからない。地図を見てもよく分からない。二時間近く探してもうだめかとあきらめて帰ろうとしたときに、雪にほとんど埋もれていた小さな石でできた案内の杭が見えた。

さらに、境内に入って、目指す岩を探したが、目の前に出現した巨石は大した印象深い巨石でもない。こんなものかとあきらめ



岩手・磐神社の巨石



磐神社巨石の言い伝え



岩手東和町・丹内山神社の巨石



丹内山巨石の言い伝え



巖美溪

かけて、たまたま神社の裏に回ってみたら、そこに「ほん」と来て良かった」と思える「巨石」があった。

何という奇妙で、神々しい「巨石」だろうと思った。「写真」でその感想が理解してもらえらると思う。

「巨石」を十分堪能した後、遅れた時間を取り戻すため、次の目的地にすぐに向かった。

*
次は「警神社」。ここもすんなりと見つからない。

あちこち走り回り、神社が立地するような山間部ではなく、田んぼの中にポツンとあったのを見つけた。

この神社は、故安倍晋三氏も「祖先の神社」として信仰していた神社である。

神社を見た後、近くに、安倍一族の居宅跡があるというので走り回って探したが、とうとう見つからなかった。

*
あちこちで、時間を浪費したので、高速を使って最

後の訪問地の「丹内山神社」に向かう。

到着したときはもうすっかり日が落ちて、薄暗い。しかし、あきらめずに「目指す巨石」を探した。

*
前日に降った雪が融けずに残ったままの参道を歩いて、神社の裏手に行った。

そこで、真っ白な雪を被った巨石に直面した。非常に立派な巨石だった。対面できたことで感激して、巨石の周りを三周ほどした。

*
肝心の「荒覇吐神(アラハバキ)」については、「警神社」の説明板では、「安倍氏は当社を守護神(荒覇吐神・あらはばきしん)として尊崇した。近くには安倍館跡があり、安倍氏は当社を「荒覇吐神(アラハバキ)」として祀ったらしい。磐井以南に威を振るう拠点をこの地に形成したと伝えられる。」と記載されている。

安倍氏にとってはよほど重要な神社だったようだ。

「丹内山神社」にある案内版には「アラハバキ大神の巨石」と記載され、巨大な自然石が御神体として祀られている。

*
「アラハバキ神社」は岩手だけではなく、宮城県にも二か所ある。筆者は、そのふたつとも訪問している。

しかし、「アラハバキ信仰」の由来はよく分かっておらず、ナゾの古代信仰である。

とはいえ、非常に興味深い神であり、信仰であることはまちがいない。

鉄や物部氏にも関連あるというが決定打ではない。まことに不思議な神さまだ。ただし、エミシと呼ばれた古代東北人と関係が深いことは十分考えられる。

これら三つの岩手の巨石神社の近くには、巨石群で有名な巖美溪もある。

なぜか仙台駅では『伊達政宗グッズブーム』

仙台駅限定日本酒『仙臺驛政宗』に伊達政宗騎馬像Tシャツ

今月、たまたま筆者のいなかにも所用があつて、宮城へ日帰り旅行をした。

用事は順調に終わり、遅めの昼食兼夕食を取ろうと仙台駅へ立ち寄った。

筆者は数か月前から『少々骨の折れる仕事』に取りかかっていたので、そのために、大好きな日本酒断ちをしていた。

すでに二か月を超える日本酒断ちは、我慢の限界はとうに過ぎていたが、自分との約束は守ろうと決めて何とか続行していた。

が、しかし、仙台駅に降り立ち、美味しそうな食事ができるところを探していたら、美味そうな宮城やその他東北の地酒の写真が目に入ってきた。

この上ない誘惑であり、迷う暇も与えなかった。

自分との約束は今日だけは棚上げと、早速お店に入ることにした。

*
日本酒のメニューを見たら、「仙台駅限定」と銘打った『仙臺驛政宗』という日本酒があるではないか。

「限定」には弱い筆者。仙台駅でしか飲めないのだから、「約束」を破つても当然で、仕方ないと言いつつ、早速注文。それが下の写真である。

一升瓶のデザインもなかなか良い。黒色ボトルに金文字も良い。

*
この『仙臺驛政宗』は、正式名称を『仙臺驛政宗 吟

のいろは』というようだ。

仙台市根白石地区の農家が育てた酒造好適米「吟のいろは」を、仙台市泉ヶ岳の麓から湧き出る美しい地下水を使って、同じ地区で酒造りを営む伊達家御酒御蔵「勝山」が造り上げた仙台生粋の日本酒である。

精米歩合五十%まで磨き、じっくりと醸したことにより、仙臺驛政宗は爽やかな香りと、甘味と酸味のバランスの良い味わい。

とにかく美味かった。

ほんとに久しぶりの日本酒だったので、この際いろいろな東北地酒をいただこうと立て続けに注文した。

満足したことは言うまでもない。

*
帰りの新幹線に乗ろうと、改札を入つてすぐ、お店が並んでいるところに、面白そうな雑貨屋があった。

新幹線の待合スペースの近くにそんな店があるのはめずらしいと興味本位でぞいてみた。

そうすると、伊達政宗グッズだらけではないか。

先ほどの『仙臺驛政宗』といい、伊達政宗グッズショップといい、何か伊達政宗の大イベントでもあるかとちょっと調べても何も無い。ただ、グッズの販売はにぎやかなようだ。

伊達政宗は仙台では文句なしに人気らしい。

せっかくなので、筆者も伊達政宗の騎馬像ロゴの入ったTシャツを購入した。



伊達政宗騎馬像Tシャツのロゴアップ



伊達政宗騎馬像Tシャツ



仙台駅限定『仙臺驛政宗』



写真で
お伝えする
東北の風景
「東北の7月」

写真撮影
尾崎匠

